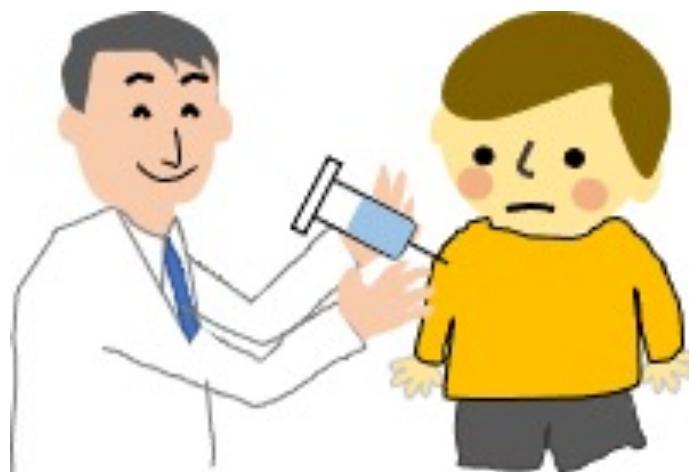


炎症性腸疾患者さんの  
インフルエンザ・帯状疱疹ワクチン接種について  
ご注意いただきたいこと

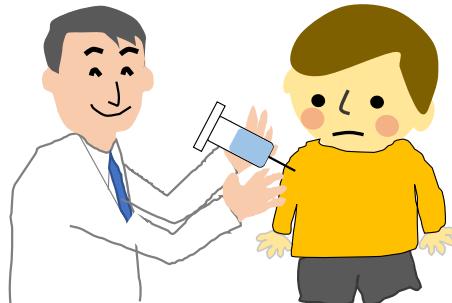


# 炎症性腸疾患患者さんの インフルエンザ・帯状疱疹ワクチン接種について

適切なワクチンの接種を受けてください

## ～インフルエンザワクチン～

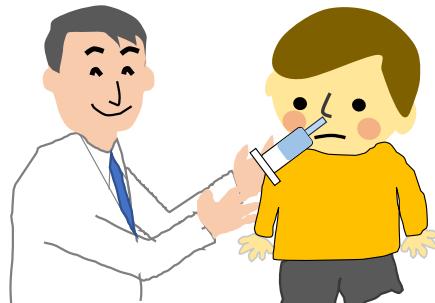
接種 ○



### 不活化ワクチン（従来型）

治療内容にかかわらず  
接種可能です

接種 ✗



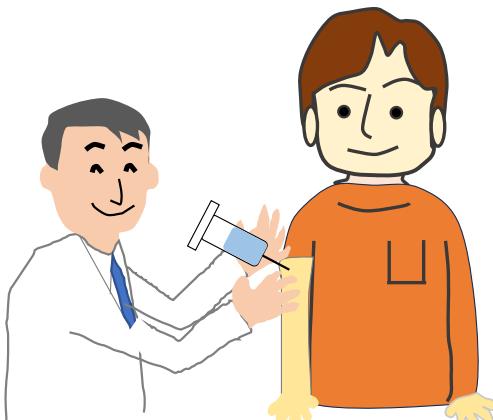
### 経鼻生ワクチン（新型；フルミスト®）

2～19歳の方が対象  
免疫抑制療法を受けている患者さん  
とその周囲の方は接種できません

## ～帯状疱疹ワクチン～

令和7年4月から高齢者の方に定期接種となりました

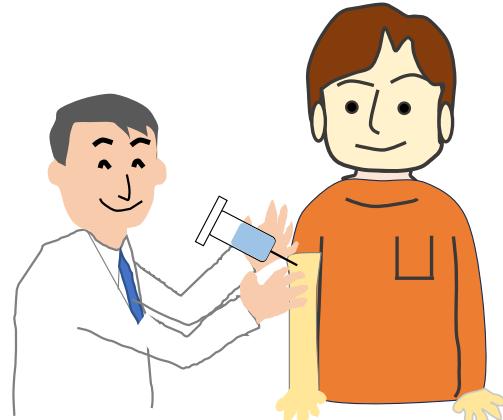
接種 ○



### 不活化ワクチン（シングリックス®）

治療内容にかかわらず  
接種可能です

接種 ✗



### 水痘・帯状疱疹生ワクチン（ビケン®）

免疫抑制療法を受けている患者さん  
は接種できません

## 炎症性腸疾患患者さんの インフルエンザ・帯状疱疹ワクチン接種について

炎症性腸疾患の患者さんは感染症の重症化リスクが高く、免疫抑制療法（3ページ参照）はそのリスクをさらに高めます。感染症の予防にはワクチン接種が効果的ですが、免疫抑制療法中は生ワクチンの接種を避ける必要があります。

ワクチン接種の留意点として、「IBD 患者におけるワクチン接種エキスパートコンセンサス」を令和4年3月に、診療現場で使いやすい冊子として「炎症性腸疾患患者さんのワクチン接種について Q&A」を令和6年8月に公開しましたが、以降、新規ワクチンの承認や適応追加・変更などが行われ（表1）、以下の留意点が新たに生じました。

### （1）経鼻生インフルエンザワクチンの新規導入

従来の注射型不活化ワクチンに加え、鼻腔内に噴霧する弱毒生ワクチン（フルミスト<sup>®</sup>）が2歳以上19歳未満の方に適用となりました。しかし、免疫抑制療法を受けている患者さん、および免疫抑制療法を受けている患者さんの家族内や周囲におられる方々は、経鼻生ワクチンを避ける必要があります。

### （2）帯状疱疹ワクチンの定期接種開始

65歳以上（一部60歳以上）の方（2ページ参照）を対象に、帯状疱疹ワクチンの定期接種が始まりました。弱毒生ワクチン（ビケン<sup>®</sup>）と不活化帯状疱疹ワクチン（シングリックス<sup>®</sup>）のいずれかを使用できますが、免疫抑制療法を受けている患者さんは生ワクチンではなく、不活化ワクチンを選択する必要があります。

本稿は、免疫抑制療法を受けている患者さんがこれらの生ワクチンの接種を間違って受けることがないよう作成しました。以降のページで詳しく説明しますので、主治医の先生と相談の上、適切にワクチンの接種を受けていただくようお願い致します。

【表1：国内で接種可能なワクチン一覧】（令和7年10月現在）

	定期接種・臨時接種	任意接種
生ワクチン	BCG 麻疹・風疹混合（MR） 麻疹、風疹、水痘 <b>帯状疱疹（水痘ワクチン：高齢者）</b> ロタウイルス（経口）：1価、5価	流行性耳下腺炎（おたふくかぜ） 黄熱 帯状疱疹（水痘ワクチン） <b>インフルエンザ（経鼻：2歳以上19歳未満）</b>
不活化ワクチン	百日咳・ジフテリア・破傷風混合（DPT） ポリオ（IPV）、インフルエンザ菌b型（Hib） <del>DPT-IPV(4種混合) → DPT-IPV-Hib (5種混合)</del> ジフテリア・破傷風トキソイド（DT） 日本脳炎、B型肝炎 <b>帯状疱疹（組換えワクチン：高齢者）</b> 肺炎球菌結合型13価 → 15価、20価 肺炎球菌（23価莢膜ポリサッカライド） インフルエンザ（皮下注射：生後6か月以上） ヒトパピローマウイルス（HPV）2価、4価、9価 新型コロナウイルス	破傷風トキソイド 成人用ジフテリアトキソイド A型肝炎 狂犬病 髄膜炎菌4価 帯状疱疹（組換えワクチン） RSウイルス（妊娠・高齢者） 肺炎球菌結合型21価 高用量インフルエンザ（高齢者） 腸チフス ダニ媒介脳炎

エキスパートコンセンサス（令和4年3月公開）以降の主な変更点について、（　）適応追加・変更、（　）新規導入、（　）製造・供給停止）として示しました。定期・任意の両方の接種が行われるワクチン（例：注射型インフルエンザワクチン）は、定期接種ワクチンにのみ記載しています。

## 【インフルエンザワクチンについて】

### 炎症性腸疾患の患者さん（2歳以上19歳未満）へ

免疫抑制療法を受けている患者さんは、  
経鼻弱毒生インフルエンザワクチン（フルミスト®）の接種は受けはいけません。

インフルエンザの生ワクチンは、ウイルスの毒性や感染力を弱めて作っています。

免疫抑制療法を受けている患者さんが生ワクチンの接種を受けると、  
ウイルスの毒性・感染力が強くなり、インフルエンザにかかり重症化する恐れがあります



免疫抑制療法を受けている患者さんがインフルエンザのワクチン接種を受ける場合は、  
不活化ワクチンの注射型インフルエンザワクチンの接種を受けてください。

\* 2歳未満、19歳以上の患者さんには、経鼻インフルエンザワクチンは適用がありません。  
免疫抑制療法の有無にかかわらず、不活化ワクチン（注射）の接種を受けてください。

### 免疫抑制療法中の炎症性腸疾患の患者さんと同居されている、 あるいは接觸する機会のある2歳以上19歳未満の方へ

経鼻弱毒生インフルエンザワクチン（フルミスト®）の接種を避けるか、  
接種後2週間は患者さんとの接觸を避けてください。

経鼻投与した生インフルエンザウイルスが飛沫・接觸によって、  
周囲の免疫抑制療法を受けている炎症性腸疾患の患者さんに感染し、  
インフルエンザにかかり重症化する恐れがあります。



該当されるご家族・周囲の方（2歳以上19歳未満）が  
インフルエンザワクチンの接種を受ける場合、  
不活化ワクチンの注射型インフルエンザワクチンの接種を受けてください。

## 【帯状疱疹ワクチンについて】

### 炎症性腸疾患の患者さんへ

高齢者を中心とする下記の方を対象に、帯状疱疹ワクチンの定期接種が始まりました。

\* 令和7年度中に65歳、70歳、75歳、80歳、85歳、90歳、95歳、100歳になる方、  
60歳から64歳の方のうち、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）により  
免疫の機能に日常生活がほとんど不可能な程度の障がいを有する方

免疫抑制療法を受けている患者さんは、  
生ワクチンの帯状疱疹ワクチン（ビケン®）の接種は受けはいけません。

帯状疱疹の生ワクチンは、ウイルスの毒性や感染力を弱めて作っています。

免疫抑制療法を受けている患者さんが生ワクチンの接種を受けると、  
ウイルスの毒性・感染力が強くなり、水痘・帯状疱疹にかかり重症化する恐れがあります



免疫抑制療法を受けている患者さんが帯状疱疹のワクチン接種を受ける場合は、  
不活化ワクチンの帯状疱疹ワクチン（シングリックス®）の接種を受けてください。

## 【炎症性腸疾患の免疫抑制療法とは?】

下記の薬が用いられている場合、免疫抑制療法に該当します。ご自身の受けている治療が免疫抑制療法に該当するかについては、主治医の先生にもご確認ください。（ ）内は代表的な医薬品名を記載しています。ジェネリック医薬品など、名称が異なることがあります。

副腎皮質ステロイド	免疫抑制薬
プレドニゾロン ブデソニド ベタメタゾンなど	タクロリムス（プログラフ <sup>®</sup> ） シクロスボリン（ネオーラル <sup>®</sup> ） 坐薬・注腸剤も含まれます。 ただし、ブデソニドは全身性 副作用は少なく、生ワクチン は禁忌とされています
免疫調節薬	TNF 阻害薬
アザチオプリン（イムラン <sup>®</sup> 、アザニン <sup>®</sup> ） 6-メルカプトプリン（ロイケリン <sup>®</sup> ） メトトレキセート（リウマトレックス <sup>®</sup> など）	インフリキシマブ（レミケード <sup>®</sup> ） アダリムマブ（ヒュミラ <sup>®</sup> ） ゴリムマブ（シンポニー <sup>®</sup> ）
IL-12/23 阻害薬	IL-23 阻害薬
ウステキヌマブ（ステラーラ <sup>®</sup> ）	リサンキズマブ（スキリージ <sup>®</sup> ） ミリキズマブ（オンボー <sup>®</sup> ） グセルクマブ（トレムフィア <sup>®</sup> ）
インテグリン阻害薬	JAK 阻害薬
ベドリズマブ（エンタイビオ <sup>®</sup> ） カロテグラストメチル（カログラ <sup>®</sup> ） 腸管局所でのみ免疫を抑制するため、 生ワクチン接種は経口ワクチンを除き可能です	トファシチニブ（ゼルヤンツ <sup>®</sup> ） フィルゴチニブ（ジセレカ <sup>®</sup> ） ウパダシチニブ（リンヴォック <sup>®</sup> ）
S1P 受容体調節剤	
オザニモド（ゼボジア <sup>®</sup> ） エトラシモド（ベルスピティ <sup>®</sup> ）	

（炎症性腸疾患患者さんのワクチン接種について Q&A』より（一部追加）

## 【免疫抑制療法中・前後における生ワクチン接種の考え方】

免疫抑制療法を受けている方は、生ワクチンは原則として接種できません。ご自身の治療内容が免疫抑制療法に該当するかどうかは、薬の表を参考にし、主治医の先生にもご相談ください。

もし、生ワクチンを未接種・未罹患の方で、治療上、免疫抑制療法の導入をしばらく待つことができる場合には、生ワクチンを先に接種し、3週間以上経過してから免疫抑制療法を開始する方法も選択できます。しかし、免疫抑制療法による早期の治療開始が必要な場合には、治療が優先されるべきでしょう。その場合は、治療開始後に病態が安定し、免疫抑制療法をすべて中止できた場合には、治療終了後3ヵ月以降に生ワクチンの接種が可能になります。生ワクチンを接種するタイミングについては、患者さんごとに異なりますので、主治医とよく相談してください。

「炎症性腸疾患患者さんのワクチン接種について Q&A」 Q7 より（一部改変）



(IBD 患者におけるワクチン接種エキスパートコンセンサスより抜粋)

**【作成委員】**

徳原大介（和歌山県立医科大学小児科）  
久松理一（杏林大学医学部消化器内科）  
新井勝大（国立成育医療研究センター消化器科/小児 IBD センター）  
渡辺憲治（富山大学炎症性腸疾患内科）  
石毛崇（群馬大学小児科）  
長沼誠（関西医科大学内科学第三講座）  
肥沼幸（国立成育医療研究センター 妊娠と薬情報センター）  
清水泰岳（国立成育医療研究センター消化器科/小児 IBD センター）  
細見周平（大阪公立大学医学部附属病院消化器内科）